第6章 花きに関する研究

第1節 研究の変遷

徳島県の花き営利栽培は、明治35年勝浦郡勝占村(現徳島市方上町)の町田瀧次郎氏によって始められ、 同氏の指導により逐次栽培者と面積が増加し、明治38年には徳島市の加藤氏により温室が建てられ、鉢花が 生産されていた。また,大正10年には小松島町でも30坪余りの温室ができ,副業的ではあるが花き生産の機 運も高まりはじめた。昭和3~5年にかけ,徳島・小松島についで,板野郡藍園村(現藍住町)と松茂村(現松茂 町)にそれぞれ300坪余りの大温室が建てられ、バラや球根草花の本格的な営利切花生産が始められた。

しかし,花き園芸業としての発展をみたのは,第2次世界大戦後で,昭和23年に全県を対象とした徳島県輸 出花き園芸農業協同組合が設立されてからである。

昭和25年度から県は花き園芸の重要性を認 め,行政施策を講じて花き増産を奨励し,優良品 種の導入,花き経営実地指導地を設置して栽培 指導を行うようになった。その後10年間に花き 生産は急増し全県的に花き生産が拡がり,昭和

35年頃には,国府町の電照ギク,鳴門市の チューリップ,石井町や海部郡のテッポウユリ, 入田町のヒメナンテン,その他枝物花木につい ても全国有数の生産が行われるようになった。 その後,種類や産地の移動はあったが着実に生 産は増加し,昭和57年には生産額にして約30 億円に達している。

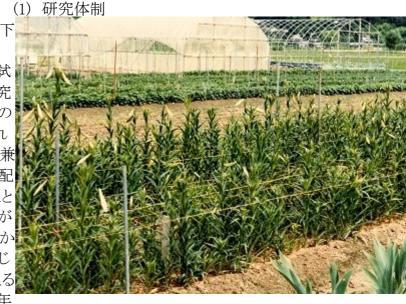
1.明治·大正·昭和(戦前)時代

明治41~43年に農事試験場業務の一環として,試験場空地利用を兼ね花き数十種を試作するとともに種 子を一般に配布し,花に関する業務は古くから行われている。しかしその後の業務には花に関するものはまっ たく見当らず、断片的にその時代の状勢に即応する形で業務が行われたものと思われる。

大正 15 年に初めて徳島県立農事試験場に 24 坪の温室が建てられ,当時すでに徳島市や小松島町で温 室による鉢物栽培があったが,花き研究に供した事例はなく,また昭和13年に62坪の温室が増改築された が、その後も野菜・果樹を中心にした研究に利用された。

2.昭和時代(戦後)

昭和25年に徳島県立農事試験場に天皇陸下 の巡幸があり、これを記念して同年3月に24 坪,7月に32坪の温室が建てられた。当時農試 の園芸部において は果樹と野菜を中心に研究 が行われていたが、ちょうど徳島県の花き生産の 気運が高まり,行政も花き生産振興に力を入れ 始めた時期でもあって、これを機会に果樹との兼 務で,花き研究員が普及所の定員で園芸部に配 属され、農業試験場で花き研究が進められること になった。翌年,4月からは花き専任の研究員が おかれ、花き研究の基礎作りを始めた。この頃か ら本県の花き生産も行政指導のもとに伸びはじ め、キク・チューリップ・ユリ等現地の要望に応える べく研究が行わ れるようになった。その後 10年

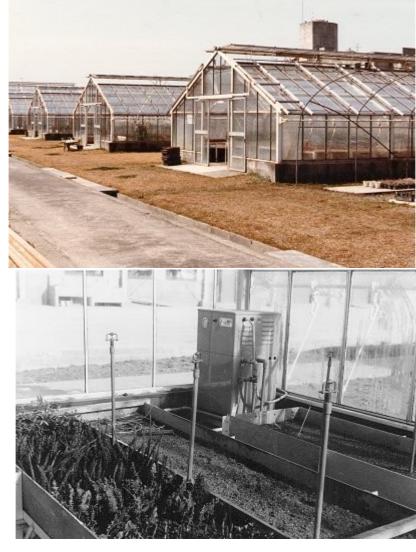


で花き栽培の研究を進めるようになった。また昭和39年には、24坪のブドウ温室を花き温室に改築し研究圃 場も漸次拡大された。 昭和46年試験場の移転に伴い,花き研究施設圃場等が整備拡充され1棟100㎡のガラス室5棟,ミスト繁

余りで生産も急増し、それに伴なって試験場における花き研究員も昭和38年に1名増員され、2名の研究員

殖用施設,低温処理用冷蔵庫20㎡等が設置されるとともに露地圃場も20aと拡大された。また翌47年には 花木見本園 20a が加わった。移転当初は圃場の排水が悪かったので土作りに専念し海砂を客土す るととも に,圃場の天地返しをはじめ暗きよ排水等も試みた。しかし3年経過後,圃場の排水不良から花木見本園は断 念せざるを得なくなった。

組織・機構面では花き研究発足当初から園芸部(昭和32年園芸科に改称)に属してきたが,昭和55年4月 に花き研究のより一層の充実をはかるために花き科が誕生し,園芸実験室の一部を研究室にあて,研究員2 名,技師1名,臨時雇用約1名,ガラス室1棟100㎡5棟,ビニールハウス50㎡4棟,ミストハウス60㎡,冷蔵室 20㎡,作業室2部屋,露地圃場20aで出発し,現在にいたっている。



昭和25年に花きの研究が始められ,見本的花

(2) 試験研究

き栽培としていろいろな種類が導入された。しか

① 切花

し研究の中心は、ガラス室を利用したストックや カーネーションの切花栽培技術改良試験で あった。その後昭和30年頃から寒ギク・県内産 テッポウユリ・アスター等の不時栽培における品 種の適応性試験を中心に、昭和38年頃まで続 けられた。 昭和35年頃から流行したれき耕栽培につい て、テッポウユリ・キクなどの試作を行った。その 後夏ギクなども導入されるとともに,集約化された

花き栽培には非常な労力を要するところから切 花栽培での省力化が問題となり,除草剤の研究 が昭和42年まで続けられた。



術の確立と開花調節技術の解明をはかった。 昭和50年代に入ってからは、キク・ヒオウギの新品種の育成、球根草花の切花品質向上技術の解明、第2次 オイルショックに伴う省エネルギー対策試験が取り上げられた。昭和50年中頃からは新しい花きとして,スター チス,新テッポウユリ等の研究が加えられるようになった。

② 鉢花 シクラメン,シネラリア(サイネリヤ)等を中心に、昭和25~30年代後半までは試作を行い、昭和30年代後半か ら試験に取り組み数年間研究を行ったが,鉢花の増産傾向がみられず一時中止した。しかし,昭和54年頃か

ら本県の鉢花生産も増加の傾向がみられるようになり、再び鉢花研究の必要性が高まったため、シクラメンを中 心に夏場の鉢花の試験を始めた。 ③ 花木 徳島県の切枝花木の生産は、関西では大阪・兵庫に続く産地として有名であるが花物としての花木がなく、高 温多雨の自然環境に適したナンテン・ヒバ・イブキ・チョウセンマキ・マサキ等が多く、栽培技術上の問題は少

なく,現地からでてきた断片的な問題の解決にあたっていた。したがって体系だった試験は少なく,昭和30年 代初期にバラの品種試験を,また40年代初期には当時全国一の生産を誇ったヒメナンテンの品質向上試験 を行い,昭和47年にはイブキ・ヒバ等の繁殖(挿木)の試験,またツツジの品種特性調査を昭和53年に行った。

④ 球根養成 徳島県における花き球根生産は、テッポウユリ・カノコユリ・アイリスが中心で、昭和24年に現在の石井町高原 でテッポウユリの球根生産が始められ海外にも輸出された。これに刺激されて昭和28年頃から県南の海部 郡でテッポウユリ球根自家生産による切花栽培が始まった。中部山間地に位置する名西郡神山町では,古く

から庭先にあったカノコユリに目をつけ、これをもとに昭和25年頃から球根生産を始め、昭和28年からこれの

輸出が始まっている。 これらユリ類の他に昭和35年頃から水田裏作にアイリスの球根生産が、徳島市国府町を初めとする吉野川 下流の水田地帯で始められた。 このような背景のもとにテッポウユリでは昭和30年から40年にかけ、植付時期、栽植方法、施肥、除草剤、病害 虫防除等の試験がなされた。昭和40年に入ってからはウイルス病の発生が多くなり、良質球選抜によるりん

片繁殖技術の解明,種球貯蔵方法などの研究が行われた。しかし,昭和48年のオイルショック以来,テッポウ ユリの切花生産が衰微の道をたどるようになり,研究も中止せざるを得なくなった。 カノコユリでは昭和34~35年にウイルス病予防試験から始められたが,昭和42年カノコユリ球根需要状勢

が大きく変わり,ウイルス保毒率の高い日本産球根がオランダ産に押されて売れなくなったため球根生産が止 まり研究も中止せざるを得なくなった。

アイリスについては昭和39~42年にかけ,植付方法をはじめ種球の貯蔵・除草剤等の研究が行われた。

⑤ 品種改良 昭和33~36年頃に本県山間部に自生するユリの中で優秀なカノコユリのあることがわかり、このユリの生い 立ちについて研究がなされた。昭和40年代後半からは本県の特産花きであるヒオウギの早生系の選抜育種 をはかるとともに、昭和50年代にはヒオウギの授粉メカニズムと品種の遺伝的形質の固定選抜を行っている。 また昭和51年度から菊の品種改良に着手した結果,優良2品種を作出し54年にそれぞれ"阿波娘""阿波 錦"と名付け、農家へ苗の配布を行うと同時にこれら品種の特性調査を進めながら、現在も交配育種をすすめ ている。